

学位（博士）論文要旨

看護学専攻 基礎看護学教育研究領域（看護技術学）	学籍番号 1033002 氏名 津田智子
論文題目	看護技術修得過程における学生の自己評価の発展過程
Key words : 看護技術、修得過程、学生の認識、自己評価、相互作用	
<p>本研究の目的は、看護技術修得過程における学生の自己評価の発展過程を明らかにし、学生の能動的な技術修得を促進する教育方法を検討することである。研究対象者はA大学の看護学生7名である。対象者は授業時間外に既習の看護技術を患者役の学生に実施し、他の研究参加メンバーや研究者とともに技術修得状況に関する振り返りを行い、看護技術を修得するまでこれを繰り返した。研究者は指導者としてこの状況に参画しながらデータ収集を行った。データは、看護技術の実施状況を記録したビデオ記録、および振り返りにおける学生・指導者の発言、そして学生の自己評価記録である。データから学生が実施した看護技術に対する評価を述べている箇所とその評価に至る体験を含めて局面として抽出し、計59の研究素材として再構成した。各研究素材を看護技術の自己評価の一般概念に照らして質的帰納的に分析し、学生毎に各局面における「自己評価の特徴」を抽出した。次に自己評価が変化し発展していく過程に着目し「各学生の自己評価の発展過程の特徴」を、そしてこれらの変化をもたらした「学生メンバー・指導者の関わり」を抽出した。最後に、全学生の自己評価の発展過程の特徴を比較検討し、その共通性から「学生の自己評価の発展過程」を、学生メンバー・指導者の関わりからの共通性から「学生メンバー・指導者の相互作用の特徴」をそれぞれ導き出した。その結果、以下のことが明らかになった。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 看護技術修得過程における学生の自己評価は、以下の3つの過程を経て段階的に変化し発展していた。各過程には、そこに至る諸過程が内包されていた。 <ol style="list-style-type: none"> 1) 自己の認識と行動を中心に振り返る状態から、自己の感情が発動する体験を契機に患者－看護者関係を評価し始め、自分にとっての学習方法を掴み始める過程 2) 看護技術の目的に照らして評価し始める状態から、自己の評価内容を能動的に問い直し始め、意識的な学習の積み重ねで看護技術が身についたことを実感する過程 3) 看護の判断規準が実感を伴って看護技術の評価規準として位置づく過程 2. 学生の自己評価が変化し発展する過程には、学生が【患者の反応の事実から評価をし直す】 【看護の判断規準を描き直す】【看護の判断規準を意識化し自己の変化・成長を自覚する】 ことを支援する学生メンバー・指導者の相互作用が存在していた。 <p>抽出された上記の「学生の自己評価の発展過程」と「学生メンバー・指導者の相互作用の特徴」から、学生の技術修得過程を促進する教育方法を検討した。その結果、〈学生の感情の発動の瞬間を捉える〉〈患者を中心に据えた看護技術の像形成を支援する〉〈五感器官を総動員した振り返りを支援する〉〈看護学上の意味ある気づきを学生が意識化できるように支援する〉〈学生の自己評価の質とその変化に着目して支援する〉ことで、学生の自己評価の発展が期待でき、学生の能動的な技術修得を促進できる可能性があることが示唆された。</p>	

指導教員氏名（自署）： 山岸 仁美

平成28年9月20日

官崎県立看護大学大学院
研究科長 山岸 仁美 様

学位論文(博士) 審査委員

主査 氏名(自署) 山岸仁美

副査 氏名(自署) 岸啓子

副査 氏名(自署) 長鶴美佐子

副査 氏名(自署) 和住淑子

学位論文審査及び最終試験の結果報告書

このたび、審査委員会として、学位論文(博士)の審査及び最終試験を終了したので、その結果について下記のとおり報告します。

記

学生氏名	津田 智子	学籍番号	1033002
看護学専攻	基礎看護学教育研究領域	指導教員氏名	山岸 仁美
成績 評価	学位 論文	合格	最終 試験
論文 題目	看護技術修得過程における学生の自己評価の発展過程		
審査 要 旨	<p>本研究は、看護技術の修得過程において学生がどのように自己評価しながら取り組んでいくのか、その変化・発展の様相を明らかにし、教育方法上の示唆を得ることを目的に取り組んだものである。</p> <p>本審査および再審査において、学生が主体的に自己評価していく様相が抽出された点は評価された。しかし、抽出された自己評価の様相と自己評価を促進する要素について、その分析過程の論述が不足していることを指摘された。本研究の独自性を明確に示すために、分析過程の論述を加え、研究結果の技術教育への活用に向けた提言までを、一貫した論旨で論述し、論文として体裁を整えた上で、再々審査を行うこととした。</p> <p>再々審査において、学生の主体的な認識活動である自己評価という内的世界を可視化し、変化し発展する過程として抽出し得た点を高く評価された。その内容をより明確に表現するためのテーマと要旨を修正するよう助言され、その結果、一貫した論旨で表現し得たことが確認された。さらに、表現を洗練させて論文としての完成度を高めるよう助言された。</p> <p>以上より、本論文は博士論文として価値あるものとして認める。</p>		